あとがき

日本が韓国（大韓帝国）を併呑し植民地化した一九一〇年から、一〇〇年の月日が流れた。本来なら、日韓関係はもちろん日中関係についても、歴史の完全な「清算」が、とうになされていなければならないはずである。だが、清算されるどころか、近年、日本の、朝鮮・中国・台湾を始めとするアジアとの関わりについて、多方面で歴史の偽造が進んでいる。最近の例では、ＮＨＫによる、司馬遼太郎『坂の上の雲』の足かけ三年にわたる放映が、その典型であろう（本書「解説」を参照のこと）。

思想史でのそれ――とはいえ問題は単なる思想史にではなく明治国家の方向づけに、したがって日本近代史の中心論点に関わるのだが――は、何より福沢諭吉に関するものであろう。最大の偽造は、福沢は対朝鮮・中国・台湾論において、初期の「啓蒙主義」的立場となんら変わることなく一貫した姿勢を貫いた、という主張である。だが、この種の偽造を超えて真実の福沢を理解することが、私たちに不可欠である。それは、日本が犯した対外的な罪を深く認識し、それを心に刻むことに通じるからである。そのためにも、福沢の対朝鮮・中国・台湾論説がもっと読まれるべきであると私は考える。

だが、『学問のすすめ』『文明論の概略』以外の福沢の著作・論説が読まれることは、ほとんどない。したがって、近代日本の基本方向を決定した一八七〇年代以降の対外政策、特に対朝鮮・中国・台湾政策において、福沢が果たしたあまりに大きな負の役割は、理解されないままである。そればかりか、実際、対朝鮮・中国・台湾に関する明治政府の政策立案・決定に多くの影響を与え、自他ともに「〔明治〕政府のお師匠様」と認める福沢の肖像が、四半世紀にわたって最高額紙幣に刻印され続けていれば、む

しろ福沢は「日本にとって良いことをした人物」（私の知る韓国人留学生のことば）と誤解され続け、ひいてはわれわれの、日本の負の歴史に対する理解も清算も困難となるであろう。本書に見るように、時にナチにさえ匹敵する政策論・アジア観を呼号し続けた福沢が「良いことをした」人物なら、あらゆる侵略主義的・帝国主義的な主張・行為が免罪されてしまう可能性がある。だがそれら主張・行為こそ、日本の負の歴史とともに、われわれが正確に認識し、心に刻み、記憶し続けなければならない当のものである。

それ故私は、韓国併合一〇〇年のいま、「脱亜論」を始めとする福沢の侵略主義的・帝国主義的な対朝鮮・中国・台湾論を一冊にまとめて出版することに大きな意義があると確信し、この論説集を編むことにした。日本の対外的な歴史に深い関心を有する読者の手に、これが届くことを切望する。

＊　＊　＊

ところで、対朝鮮・中国・台湾論においても初期「啓蒙主義」的立場を貫いた、明治における典型的な市民的自由主義者という福沢像を偽造したのは、丸山真男である（『福沢諭吉の哲学』岩波文庫、122）。一般に自国の思想を持ち上げたくなる心理は、分からないではない。特に丸山のように、超国家主義的な思想一色に塗りつぶされた時代を生き抜いた学者にとって、それとは別種の思想が日本にあったと見なしたい心理は、痛いほど分かる。

だが、そうした単なる期待と願望に基づく真実の隠蔽・歴史の捏造は、断じて学者のすることではない。しかし丸山真男が福沢について行ったことは、結局この種の捏造である。福沢の思想はむしろ、丸山が嫌った超国家主義の原型を示しているにもかかわらず、丸山はそれを典型的に示す『時事新報』論

説をほとんど無視することで、偽りの福沢像を作ったのである。一九四五年にいたる日本の超国家主義は、単に政府・軍の中枢に生長したのではなく、それを強く支える思想とともにあったのだが、本書に見るように、その思想の最大の担い手の一人が福沢だったのである。

丸山は、学問研究の厳しさを明確に自覚した学者であった。客観性をめざして、「希望や意欲による認識のくもりを不断に警戒する」必要を説いていたのは、丸山であった（『丸山真男集 第三巻』岩波書店、151）。だがその丸山自身が、実は、少なくとも福沢像形成において「希望や意欲による認識のくもり」という誘惑を、（おそらく）そうと知りつつ払拭できなかったという事実は、日本思想研究史上の最大の汚点であると同時に、丸山の学問的成果それ自体の真価を疑わしめるに十分である。依然として丸山真男の後進への影響は大きいが、「丸山神話」にとらわれることなく、真実の福沢像が、したがって日本の真実の歴史像が探求されなければならない（安川寿之輔『福沢諭吉と丸山真男』）。

なお、偽りの福沢像の形成という点では、歴史学者・羽仁五郎の責任も大きい。羽仁は『白石・諭吉』（岩波書店、一九三七年刊）で、福沢の言葉を多量に引用しつつ当時のファシズム体制を批判した（235以下）。歴史的に見たとき、それは一定の意義を有してはいた。とはいえ、そのことと福沢の実像いかんは、おのずから別である。それにもかかわらず羽仁は戦後、少なくない著書で、福沢を「原理・原則のある思想家」と持ち上げ続けたのである。だが実は、福沢ほど「原理・原則」を欠いた「思想家」もめずらしい。確かに福沢に原理・原則があったと言ってもよい。だがそれは、無条件に明治政府の後押しをし、時にはそれを超国家主義的な方向へと煽動する点においてである。羽仁もまた丸山と同様に、福沢像の形成において、「希望や意欲による認識のくもりを不断に警戒する」ことを怠ったと言わなけ

ればならない。

＊　＊　＊

質において丸山の研究とはとうてい比較にならない水準のものだが、いま新たな福沢美化論が出回っている（井田進也『歴史とテクスト』、平山洋『福沢諭吉の真実』）。井田・平山は、福沢の侵略主義的な対朝鮮・中国・台湾論説を書いたのは福沢自身ではなく、その弟子筋であると主張する。だが、「解説」で詳論したように、福沢が立案し弟子に起草させた後に添削して仕上げた論説が一部にあるのは事実だとしても、それさえ紛れもなく福沢の思想の表現である。絵描き工房を指揮する親方――それがレオナルドの師匠たるヴェロッキオであろうと、有名なルーベンスであろうと――の作品には、工房職人の手が入っている場合があるが、それを知っていればこうした擬似問題は提出されるはずもなかったのだが。福沢が朝鮮・中国・台湾論説を公表したのは『時事新報』紙上においてだが、同紙はいわば福沢「工房」において、親方である福沢の宰領下において発行され続けたのである。『時事新報』紙上の社説は、福沢の思想以外の何ものでもない。

井田・平山の研究手法のずさんさ（特に後者の）については、「解説」でかなりページを使って批判したが、さらに言うべきことは多々ある。幸い「あとがき」を書く余白が得られたので一点だけ付け加えれば、例えば平山は、一八九八年九月に福沢が脳卒中で倒れて以降、『時事新報』紙上に公表された論説に福沢は一切関わっていない（同146）、「大病後は失語症だった福沢が『福沢諭吉伝』では話をしている」（同141）などと、多くの証言をまともな理由を示さないまま一蹴し、文字通り針小棒大なやり方で（しかも存在さえ確認できない典拠を持ち出すことで）上記のように結論づけているが、これらの、ほとんど

臆断――むしろ肥大した妄想――にもとづく主張が、学問の名の下になされたという事実に、暗澹たる気持ちを抱かざるをえない。

こうした擬似学問を、福沢の専門家・日本思想史の研究者がまともに取り上げないのは、ある意味で当然であろうが（唯一の例外は安川寿之輔『福沢諭吉の戦争論と天皇制論』）、しかしそうやって擬似学問を放置すると、それがいつの間にかマスコミの話題となり、論壇に浸透し、結局世間に流布してしまうことを、私は恐れる。その危険をいみじくも示したのが、評論家・佐高信の『福沢諭吉伝説』だが、管見ではこの擬似学問の影響は、他にも目立たぬ形で及んでいる。福沢専門家はもちろん日本思想史の研究者は、井田および平山の説を、そしてそれに対する私の批判を虚心に検討するよう、強く望む。井田・平山が行ったのは擬似学問であっても、それ自体、学問的な検討の対象としなければならない。学問は真理の探究を通じて歴史・社会に奉仕すべきだが、擬似学問を放置すれば歴史は偽造され、社会は再び誤った道を歩ませられるであろう。

＊　＊　＊

私は、朝鮮を含むアジア史の専門家ではない。本書で、福沢が『時事新報』論説で論及した、もしくは自ら関係した歴史的諸事件について、注等で詳しく論及したが、第一次史料ならびにたくさんの碩学たちの文献に依拠したとはいえ、私の論及に思わぬ誤りがないかどうかを恐れる。読者の忌憚のないご批判・ご指摘を、お願いする。

二〇一〇年九月二七日

杉田　聡